

## 当事者と第三者間の立場の違いが後知恵バイアスにおよぼす影響

河野 さつ希

出来事の結果に対する評価や対処方法は、その結果によって異なる。さらに一つの結果に対しても、人の立場によって反応は異なる。どのような場面においても人間が自己を守ろうとする認知的なメカニズムが作用している。この認知バイアスの中でも特に、出来事の結果に応じて対象への評価を変えたり、明らかになった結果の方向性に沿って、事前に見積もっていた可能性を変えたりする傾向(後知恵バイアス)がある。Fischhoff (1975)によって提唱されたこの概念は、裁判や医療ミス、人事評価等の実用的な場面を用いて確認されている。バイアスが、過失判断や責任の帰属に影響していることも明らかとなり(Aileen & Ingke, 2016)、後知恵バイアス研究の有用性が証明されている。後知恵バイアスについては、多くの研究が行われてきたが、様々な理論が提唱されてきた。これを Blank らは感情制御のメカニズムに基づき、「必然性(inevitably)の知覚」、「予測可能性(foreseenability)の知覚」、「記憶の歪み(memory distortions)」の3つの要素で構成されているとした(Blank, Nestler, von Collani, & Ficher, 2008)。必然性の知覚とは、出来事の結果をいったん知るとその出来事の必然性の知覚を変える傾向であり、ネガティブな感情に対処する機能を持つ。また、予測可能性の知覚は、ある出来事が起こったとき、事前にそれがわかっていたと考える傾向であり、それはメタ認知や動機的なプロセスによって生じ、自己防衛的機能を果たす。また、記憶の歪みは、元の判断よりも出来事の結果に近い判断が想起されることであり、知識がアップデートされることによって生じるとされている。このように感情制御のメカニズムが後知恵バイアスに関わることから、感情の強度が後知恵バイアスに影響し、さらに「立場」という要因が後知恵バイアスに影響することが仮定される。しかし「立場」の違いに焦点を当てた研究は行われていない。そこで、「立場」の違いによる感情の違いに着目し、仮説 1「第三者よりも当事者において後知恵バイアスが強く現れる」、仮説 2「ポジティブな結末よりもネガティブな結末で後知恵バイアスが強く現れる」、を設定して調査を行なった。

本調査では、立場の違い(当事者・第三者)と、結末の違い(結末なし・ネガティブ・ポジティブ)が後知恵バイアスに及ぼす影響を検討するため、場面想定法を用いた調査紙を作成し、回答を求めた。

分析の結果、仮説 1「第三者よりも当事者において後知恵バイアスが強く現れる」はネガティブな結末条件においてのみ支持されたが、その他の分析においては有意な差が見られなかった。また、仮説 2「ポジティブな結末よりもネガティブな結末で後知恵バイアスが強く現れる」は当事者条件においてのみ支持された。その他の分析においても、ネガティブな結末条件は有意な差が認められており、ネガティブな結末はネガティブな感情を引き起こし、自己防衛的な反応を生起させるということが明らかとなった。以上より、立場の違いによる後知恵バイアスの変化は、ネガティブな結末を提示された条件において、第三者よりも当事者において強く現れることが認められた。この結果から、実際に出来事の結果の判断をする際には、立場の違いによってバイアスの影響が異なることを認識する必要があると言える。問題点としては、本研究では、部分的にしか「立場」の違いによる後知恵バイアスに有意な差が見られなかったことが挙げられる。これは調査の際にディセプションを用いておらず、リアクタンス効果が発生してしまったためと考えられる。そこで、今後調査方法を改善し、さらなる後知恵バイアス研究を行っていくことが望まれる。(社会心理学)